

ダニエル書10章10-21節 「国々の興亡と霊の戦い」②

1A 主の使いの現れ 1-9

1B 三週間の断食 1-3

2B キリストの栄光の輝き 4-9

2A ダニエルへの励まし 10-19

1B ペルシアの君の妨げ 10-14

2B 立ち上がるダニエル 15-19

3A イスラエルを守るミカエル 20-21

本文

ダニエル書 10 章を開いてください。前回、1-9 節まで見てきました。ダニエルが心を定めて、今、起こっていることについて、悟りを得たいと願って断食していました。おそらく、帰還後のユダヤ人がなお困難の中にいたことを祈っていたのだと思います。そこで、主イエスご自身であろう、主からの使いがダニエルに現れました。それで、ダニエルは自分がもうだめになると思うほど、倒れてしまいました。しかし、特別に愛された者よ、と呼ばれて、その祈りへの答えとして、大きな戦についての真理を伝えられます。ところが、10 節から、ダニエルが祈り始めてから、なぜ三週間経っていたのか、その理由を、御使い自身が伝えます。ペルシアの君という存在があったからです。私たちはこれまで、世界帝国の興亡の幻を見てきました。その背後には、主権とか、権力、権威とか呼ばれる天の存在、サタンに付いている、墮落した天使どもがいることを見ていきます。

2A ダニエルへの励まし 10-21

1B ペルシアの君の妨げ 10-14

¹⁰ちょうどそのとき、一つの手が私に触れて、膝と手のひらをついていた私を揺さぶった。¹¹それから彼は私に言った。「特別に愛されている人ダニエルよ、私が今から語ることばをよく理解せよ。そこに立ち上がれ。私は今、あなたに遣わされたのだ。」彼がこのことばを私に語っている間に、私は震えながら立ち上がった。

ここで御使いたちが、彼に「特別に愛されている人ダニエルよ」と言っています。まさにダニエルが、自分もうだめだ、終わってしまっていると思っているその時に、主は、「あなたは愛されているのだ」と言われるのです。これから、真理の書に記されている将来の事柄を彼に示されるのです。主はご自分の愛と憐れみ、恵みによって私たちを召してくださいます。ペテロが、自分の罪深さをはっきりと知って、「主よ、私から離れてください。私は罪深い人間ですから。(ルカ 5:8)」と言いました。夜通し漁をしたのに一匹もとれなかったところ、大漁を与えられたことによって、イエス様の栄光の姿を目の当たりにしたからです。イエス様は、ペテロがもうだめだと思ったその時に、「恐れ

ることではない。今から後、あなたは人間を捕るようになるのです。(5:10)」と言われました。

主は、ご自分の愛される者に、ご自分のなされることを明かされます。その一人がアブラハムです。三人の旅人がアブラハムの所に訪れて、そして二人はソドムの方に発ちました。残された一人は主ご自身でありイエス・キリストです。ちょうど、ダニエルと同じです。受肉される前の主です。こう考えられました。「わたしは、自分がしようとしていることを、アブラハムに隠しておくべきだろうか。(創世 18:17)」ヤコブ書またイザヤ書(41:8)に、アブラハムが「神の友(2:23)」と呼ばれています。親しい友に隠し事をしたくない、全てを話したいという神の願いです。イエス様は弟子たちに「あなたがたはわたしの友だから、父から聞いたことを、あなたがたに知らせたのです」ということを言われました(ヨハネ 15:14-15 参照)。

主がアブラハムに知らせたことは、ソドムを火で裁くことでした。これは、到底アブラハムには受け入れられませんでした。そこに自分の甥ロトが住んでいるからです。それで彼は必死にソドムの町のために主の前で執り成しました。主は、ものすごい大きな寛容で、十人の正しい人がいれば、その町を赦すと約束されました。(十人もいなかったのも、裁かれましたが。)ダニエルがこれから受ける幻も同じような重い内容です。大きな戦についてのことであり、そして終わりの日に至るものであり、その中でイスラエルの民が大きな試練を受ける内容です。そのことを伝えることは、それなりの耳がなければ聞き入れることができません。しかしそのことを、主に愛されているという保障の中で、安心感の中で初めて聞くことができます。

¹² 彼は私に言った。「恐れるな、ダニエル。あなたが心を定めて、悟りを得ようとし、自分の神の前で自らを戒めようとしたその最初の日から、あなたのことばは聞かれている。私が来たのは、あなたのことばのためだ。¹³ ペルシアの国の君が二十一日間、私に対峙して立っていたが、そこに最高位の君の一人ミカエルが私を助けに来てくれた。私がペルシアの王たちのところに残されていたからだ。

ダニエルは、9章から、この心を定めて祈るいのりを献げました。「9:3 そこで私は、顔を神である主に向けて断食し、粗布をまとって灰をかぶり、祈りと哀願をもって主を求めた。」ここでは、心を定めて、悟りを得ようとしていました。そして自らを戒める、つまり断食していました。エルサレムの荒廃が終わるまでの年数が七十年であると定められていたので、それで彼は悔い改めと哀願の祈りを捧げました。今、キュロス王によって帰還命令が出たのに、帰還民が困難に面しているのを知っているのでしょう。それで、そのことについて悟るために断食して祈っているのです。これは、御心にならなっており、祈りを献げたときから、主は聞いておられました。ヨハネが第一の手紙で言っているとおりです。「5:14-15 何事でも神のみこころにしたがって願うなら、神は聞いてくださること、これこそ神に対して私たちが抱いている確信です。15 私たちが願うことは何でも神が聞いてくださると分かるなら、私たちは、神に願い求めたことをすでに手にしていると分かります。」

しかし、ペルシアの君がそれを妨げたのです。祈りはじめてから三週間経っていたのですが、その間ずっと対峙して立っていました。そして、ギリシアの君が後でやって来るとも、この御使いはダニエルに教えます。それに対して、彼らに立ち向かうのはミカエルしかないとも言います。これらは一体、どのような存在なのでしょう？ここで私たちは、主権とか、国とか、権威、力と呼ばれているものには、天にいる目に見えない勢力があるのだということを知る必要があります。

エペソ人への手紙で、パウロは、こうした存在について書いています。「エペ 1:20-21 この大能の力を神はキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上でご自分の右の座に着かせて、21 すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世だけでなく、次に来る世においても、となえられるすべての名の上に置かれました。」天において、支配、権威、権力、主権と呼ばれる存在があるのです。そして、ここに意識されている、天における勢力は、神に仕える御使いたちのみならず、反抗する、サタンについている堕落した使いたちもいることを、パウロは明らかにしています。「2:1-2 さて、あなたがたは自分の背きと罪の中に死んでいた者であり、2 かつては、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って歩んでいました。」罪の中に生きている人々には、空中に権威を持つ支配者がいるのだということです。そして、6 章にはこう言っています。「エペ 6:12 私たちの格闘は血肉に対するものではなく、支配、力、この暗闇の世界の支配者たち、また天上にいるもろもろの悪霊に対するものです。」

私たちキリスト者は、しっかりとふまえなければいけないのは、目で見ることのできる世界だけで、世界が成り立っているのではないということです。これら目に見えるものは現実に存在し、これは仮現、そう見えるだけで存在しないというものではありません。確実に存在するのです。けれども、目に見えるものだけでなく、目に見えない世界が、いやむしろ目に見えない世界のほうが、目に見えるところよりも、さらに確実に存在しているということです。そして、目に見えない勢力が、目に見えているものに影響を与えているということを知る必要があります。それは、同じ空間に、同じ時間に存在しているということを知らないといけません。

分かりやすい出来事は、預言者エリシャの家を、アラムの軍隊が取り囲んだ時のことです。馬と戦車の軍隊がその町を包囲していました。それを見た若者が、「ああ、ご主人様。どうしたらよいのでしょうか。」と嘆きました(Ⅱ列王 6:15)。エリシャは、「恐れるな。私たちとともにいる者は、彼らとともにいる者よりも多いのだから。」と励まします(16 節)。そして、祈ります。「6:17「どうか、彼の目を開いて、見えるようにしてください。」【主】がその若者の目を開かれたので、彼が見ると、なんと、火の馬と戦車がエリシャを取り巻いて山に満ちていた。」その包囲していた軍隊を、火の馬と戦車が取り巻いていたのです。

私たちは、ロマ 13 章で、「13:1 人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威は

なく、存在している権威はすべて、神によって立てられているからです。」ということ学びました。ですから、上に立てられている権威は従い、敬うべきであることを、使徒ペテロも第一の手紙で教えています。それは、私たちキリスト者、神に従う者たちが心得ているべきことです。しかし、それは、権威がいつも神のみこころを行っているということとは限りません。パウロは、主人に対する勧めで、奴隷に正義と公平を示しなさいと教えています。「コロ 4:1 主人たちよ。あなたがたは、自分たちも天に主人を持つ者だと知っているのですから、奴隷に対して正義と公平を示しなさい。」主によって権威が与えられているからこそ、自分の上にある権威を覚えて、恐れかしこむ必要があるということです。

ところが、自分に与えられている権威や力が、神からのものだと認めないで、自分の権威、自分の力なのだとする時に、そこにはサタンがいます。エバが、善悪の知識の木から、サタンのそそのかしによって実を取って食べたように、上に立つ者たちがその実を取って食べる誘惑が、そうでない人々以上に特別なものがあるのです。ですから、ダニエル書に現れる、バビロン、ペルシア、ギリシア、そしてローマですが、これらは神によって立てられた権威、主権、力であるのですが、それは、それらの主権者、王たちが必ずしも、神を恐れ敬って、正義と公正を行なうとは限らないということです。それで、ダニエルの見た夢には、獰猛な獣という形で現れます。そして横柄さが目立ちます。ネブカドネツアルは、そのことを痛い教訓で学び、自分の上に天の神がおられることを認めましたが、多くの王たちはそうではありません。そのために、その高慢の背後に、自ら高慢によって墮ちたサタンが待ち構えているのです。

そこで、ペルシアの君については、エズラ記を見れば、主がキュロスの心を動かし、奮い立たせ、ユダヤ人を帰還させましたが、帰還した者たちが、非常な困難の中にあるところに現れています。その神殿の建築を阻止する勢力がいます。ネヘミヤ記にも、執拗な反対と陰謀がネヘミヤに対して向けられました。新約時代には、ペテロが第一の手紙で、困難の中にいる兄弟たちに、悪魔に対抗しなさいと励ましています。「5:8-9 身を慎み、目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、吼えたける獅子のように、だれかを食い尽くそうと探し回っています。9 強く信仰に立って、この悪魔に対抗しなさい。ご存じのように、世界中で、あなたがたの兄弟たちが同じ苦難を通過してきているのです。」このように、ペルシアの時代にも、ローマの時代にも、悪魔が背後に働いて、兄弟たちに反対し、告発していたということが出来ます。

私たちは、そういった意味からも、上に立つ人々のために執り成す必要があります。正義と公正を行なうことができるように。知恵が与えられるように、祈るのです。そして、これらの権威を通して、悪魔が現れ、牙をキリスト者に対して向くこともあります。しかし、今読んだように悪魔に対抗するのです。信仰に強く立って、対抗します。

そして、福音宣教において、また教会に建て上げにおいても、霊の戦いがあります。。テサロニ

ケの人たちに送った第一の手紙には、サタンが妨げたとパウロがはっきりと言っている箇所があります。「2:18 それで私たちは、あなたがたのところに行こうとしました。私パウロは何度も行こうとしました。しかし、サタンが私たちを妨げたのです。」テサロニケの人たちはイエス様を信じましたが、パウロは彼らを育て、養う期間が全く無いままに、迫害の手が伸びてきたのでそこから逃げました。そしてテサロニケの人たちも迫害と困難の中にいました。パウロの一行は何とかして、彼らを信仰の中に堅く立てられるように願って、引き続き彼らに届こうとしたのですが、できませんでした。このように、福音を語る事、また福音にしっかり立つように励ますことを、サタンは何とかして阻止しようと戦いを挑みます。

そして、「最高位の君の一人ミカエルが私を助けに来てくれた。」と御使いが言っています。最高位の君とのことですが、以前の訳ですと天使長ともありました。天使は、軍隊のような、はっきりとした指令系統があります。聖書では、天使のことを「軍勢」と呼んでいます。8章において、大祭司や神に仕えている人々のこと「天の軍勢」と呼びました(8:10)。それは、彼らを守り、見張っている天使の軍勢がいたからです。主ご自身が、「万軍の主」と呼ばれているのはそのためです。その指令系統の中で彼らは動いています。

その中で、ミカエルはその中で最高位の君の一人です。一人と言っていますから、他にも最高位の君がいるということです。聖書では、ダニエルに、メシアが来られることを告げるガブリエルがいますね。また、創世記、エゼキエル書など多数、聖書に現れる天使は、ケルビムがいます。アダムとエバがエデンの園から追放された時に、炎の剣で園を守っていました。そして礼拝において、主の御座の前において、礼拝を導いています。彼も最高位の君の一人なのではないか？と思います。そして、墮落したけれども、神のところの近くにいた天使として、ルシファー、明けの明星がいますね。おるべき領域を守らずに、神のようになろうと高慢になって、それで墮落しました。サタンと呼ばれます。

そして、ミカエルに話を戻しますが、ミカエルは戦う天使のようです。主が選ばれたしもべ、モーセの遺体について、悪魔と言い争いました。「ユダ 9 御使いのかしらミカエルは、モーセのからだについて悪魔と論じて言い争ったとき、ののしってさばきを宣言することはあえてせず、むしろ「主がおまえをとがめてくださるように」と言いました。」モーセのからだは、主が葬られたことが申命記に書いてあります。「34:6 主は彼を、ベテ・ペオルの向かいにあるモアブの地の谷に葬られたが、今日に至るまで、その墓を知る者はいない。」ですから、悪魔は、ここでモーセの墓の場所を暴いて、モーセへの崇拝のような人の崇拝、偶像礼拝を引き起こそうとしたのでしょうか？理由は分かりませんが、ミカエルは悪魔とモーセのからだのことで論じ合っています。

そして、黙示録 12 章には、サタンとの戦いが、空中で繰り広げられている姿を見ます。これは 20-12 節のところでじっくりと見てみたいと思います。

¹⁴ 私は、終わりの日にあなたの民に起こることを分からせるために来た。その幻は来たるべき日を待たなくてはならないが。」

主がダニエルに伝えたい日があって、それが、終わりの日のことです。私たちは、ダニエル書が「終わりの日」に注目していることを見てきました。ネブカドネツアルが見た夢について、ダニエルが言いました。「2:28a しかし天に秘密を明らかにするひとりの神がおられます。この方が終わりの日に起こることをネブカドネツアル王に示されたのです。」そして、ダニエルの見た夢、雄羊と雄山羊の戦いについて、そして雄山羊から出てきた角が、聖なる所を覆すことについての幻について、ガブリエルがこう言いました。「8:19 見よ。私は、終わりの憤りの時に起こることをあなたに知らせる。それは、終わりの定めの際に関わることだ。」このようにして、終わりの日についての、大いなる戦いが、これからダニエルに教える真理であります。

そして、さらに「あなたの民に起こること」ということであります。このことも、何度となくダニエルに示されました。7章の四つの獣の幻について、人の子が来られて、永遠の御国が立てられたら、それを聖徒たちが受け継ぐという約束がありました。これは、イスラエルの残りの者たちが、主が来られることによって救われ、旧約時代の眠った者たちもよみがえり、そして、永遠の御国を受け継ぎます。もちろん、異邦人たちもキリストにつながれて、ユダヤ人たちと共に教会として、御国を受け継ぐこととなります。そして、8章では、ユダヤ人たちに大きな試練が、荒らす忌まわしいことが起こることが予告されました。9章では、エルサレムの宮と聖所について、七十週が定められていて、その荒らす忌まわしいことは、最後の週で起こり、そこでささげ物やいけにえがやめさせられることが告げられました。このようにして、終わりの日にユダヤ人たちに起こることの幻が積み上げられて、ついに11章と12章で、どのように終末を迎えるのか、そのクライマックスが示されます。

2B 立ち上がるダニエル 15-19

¹⁵ 彼が私にこのことを語っている間、私はうつむいて黙っていた。¹⁶ ちょうどそのとき、人のような姿をした方が私の唇に触れた。それで私は口を開いて話し出し、私に向かって立っていた方に言った。「わが主よ。私はこの幻によって苦痛に襲われ、力を保てなくなりました。¹⁷ わが主のしもべが、どうしてわが主と話せるでしょう。私には、もはや力はなく、息も残っていません。」

前回の学びで、ダニエルに現れた方が、神の御座にある栄光を表した姿でダニエルに現れたところを読みました。「10:5-6 私は目を上げた。見ると、そこに一人の人がいて、亜麻布の衣をまとい、腰にウファズの金の帯を締めていた。6 そのからだは緑柱石のようで、顔は稲妻のよう、目は燃えるたいまつのもようであった。また、腕と足は磨き上げた青銅のようで、彼の語る声は群衆の声のもようであった。」そして、この方が黙示録1章によれば、イエス・キリストご自身ではないか？というお話をしました。問題は、13節で、ペルシアの君によってダニエルのところにまで来るのを、阻まれていたということです。主ご自身ならば、どうしてそうなるのか？ということです。いろいろな可能

性を挙げましたが、その一つが、10 節から 14 節までに現れている御使いは、5-6 節に現れている方と違う御使いなのではないか？ということです。

今、ここで、「人のような姿をした方」として表れています。この方は再び、5-6 節の方、つまり主ご自身ではないか？とも思われます。15 節の始まりの「彼」というのは、ペルシアの君に行く手を阻まれた御使いで、その間に、「人のような姿をした方」として現れているので、別人です。エゼキエル 1 章には、ケルビムの上に、「人間の姿に似たものがあつた。」とあり、この方は主ご自身、イエス・キリストご自身だと考えられます。そしてダニエル 8 章では、「人の子」としてイエス様が現れています。ゆえに、ここも主イエスご自身ではないか？とも考えられます。

この方が、「私の唇に触れた。」とあります。これは、イザヤに対して、御使いが彼の唇に触れたのと似ています。「6:6-7 すると、私のもとにセラフィムのひとりが飛んで来た。その手には、祭壇の上から火ばさみで取った、燃えさかる炭があつた。7 彼は、私の口にそれを触れさせて言った。「見よ。これがあなたの唇に触れたので、あなたの咎は取り除かれ、あなたの罪も赦された。」」ダニエルも、罪ある人間ですから、神の憐れみで、触れられることによってようやく、神に清められ、それで語る事ができたようです。

18 すると、人のように見える方が、再び私に触れてカづけてくれた。 19 その方は言った。「特別に愛されている人よ、恐れるな。安心せよ。強くあれ。強くあれ。」その方が私にそう言ったとき、私は奮い立って言った。「わが主よ、お話しください。あなたは私をカづけてくださいましたから。」

主が何度も何度も、恐れるな、安心せよと励ましてくださったから、それで彼は主の言葉を聞く力が与えられました。同じように、主ご自身も、人として地上を歩まれていた時に、霊の戦いの中で、御使いから近づけられていました。主が、今ダニエルを助けておられますが、人としてのキリストも御使いによって助けられました。「マルコ 1:13 イエスは四十日間荒野にいて、サタンを試みを受けられた。イエスは野の獣とともにおられ、御使いたちが仕えていた。」そして、ゲッセマネの園においても、御使いが助けていました。「ルカ 22:43-44 すると、御使いが天から現れて、イエスをカづけた。イエスは苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた。」

同じように、いかに私たちが、神の愛と憐れみを必要としているか思われます。私たちに神は大きなことを任せられます。信仰生活を送ること自体も、大きな務めとも言えるのではないのでしょうか？自分は今もう語ることもできない、祈ることもできないと、大いなる神を思う時にダニエルのように、うつむいてしまうかもしれません。しかし、そこで御使いまた主ご自身が助けてくれます。その新たな力を与えてくれるような霊的体験を与えてくれます。自分が本当にだめだと思ったその瞬間に、主の憐れみによって立ち上がることが出来るようしてくださいませ。

3A イスラエルを守るミカエル 20-21

20 すると彼は言った。「私がなぜあなたのところに来たか、知っているか。今、私はペルシアの君と戦うために帰って行く。私が去ると、見よ、ギリシアの君がやって来る。21 しかし、真理の書に記されていることを、あなたに知らせよう。私とともに奮い立って、彼らに立ち向かう者は、あなたがたの君ミカエルのほかにはいない。

これから、ペルシアの国で起こることの預言が、11 章にあります。その後で、ギリシアが台頭し、ギリシアで起こることがあります。その真実を明かすために、壮絶な霊の戦いがあったのですが、人の姿を取った方は、初めにペルシアの君と戦い、次にギリシアの君と戦われます。そして、共に彼らに立ち向かうのが、ミカエルしかないということです。そして、そのミカエルは、「あなたがたの君」ということです。そう、イスラエルのために戦う君であります。11 章の終わりで、イスラエルの民が絶体絶命に陥っているのですが、12 章の始まりに、「あなたの国と人々を守る大いなる者、ミカエルが立ち上がる。(1 節)」とあります。他には、主がイスラエルを救われる働きに加勢する御使いがいなかったということです。

イスラエルの国とその人々の背後に、ミカエルがいるということは、黙示録 12 章で明らかにされています。そこには、女の幻があり、その女を滅ぼそうとしている、「炎のような赤い大きな竜」が現れています。女が産む子を、食べてしまおうとしますが、それに失敗します。その後で、天における戦いの場面が出てきます。「12:7-9 さて、天に戦いが起こって、ミカエルとその御使いたちは竜と戦った。竜とその使いたちも戦ったが、8 勝つことができず、天にはもはや彼らのいる場所がなくなった。9 こうして、その大きな竜、すなわち、古い蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれる者、全世界を惑わす者が地に投げ落とされた。また、彼の使いたちも彼とともに投げ落とされた。」そして彼は投げ落とされて、女たちを滅ぼそうとします。それが、一時と二時と半時の間、つまり、第七十週の後半の三年半です。彼女は、荒野において、その地形によって守られます。この前話しましたように、それはエドムの地にある、首都ボツラ、今のペトラと考えられますが、そこで匿われます。

このようにして、イスラエルの国と民は、絶えず敵がいて、これを滅ぼそうとする霊の勢力がいるのだということを知る必要があります。そして、ミカエルの他は加勢しないとのことで、イスラエルは、歴史的にも、これからも孤立していく道を歩んでいます。苦しみの時に彼らと共に立つことができるのか？というのは、聖書にある、この神のご計画を知っている者たちしか分らないです。イスラエルの民が、その民の誕生の時から、すなわち出エジプト記の時代から、ヘブル人の男の子がナイル川に投げ込まれるという、滅ぼされるところから救い出されることによって、迫害を受けていました。それが今にまで続き、終わりの日に主が来られ、救われることによって、完全な安全を手に入れることができるのです。

「真理の書」と言っていますが、神には書物があります。永遠のいのちの書がありますし、行い

の書もありますし、一人ひとりの名が書き記されています。そして、ここには真理の書です。これから起こることについての、真実です。

以上、激しい戦いがある中で、言葉を伝えるために御使いがダニエルの所に来たのです。それが、「ヨハ 8:32 あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」と言われましたが、時にその真理は私たちの心を引き裂きます。知ることによって自由にされるのですが、その知識は時に辛く、苦々しく感じる時もあります。ダニエルのように、押しつぶされてしまいそうな重圧感に悩まされることもあるかもしれません。人が罪を犯して、死後に神の裁きが定められていること、この真理に私たちは押しつぶされそうになったことがあるでしょうか？けれども、そこからもだえ苦しむような祈りが始まります。この愛する人をお救いくださいという祈りが始まります。そしてその祈りを御使いが助けてくれます。